

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。ただし、【】は語句の意味で、解答の字数に含めないものとします。

しかし、世の中にはむずかしい本があります。どうすればたくさんの本を読んで、いつもそれをわかることができるようになるでしょうか。その方法は簡単です。しかし、おそらく読書においてもっとも大切なことの一つです。すなわち、自分のわからない本はいつさい読まないということ、そうすれば、絶えず本を読みながら、どの本もよくわかることができます。少しページをめくってみて、（B）少し読みかけてみて、考えてもわかりそうもない本は読まないことにするのが賢明（けんめい）でしょう。一冊の本がわからないということ、ただそれだけでは、あなたが悪いということにもならず、またその本が悪いということにもならない。これはよく心得ておくべきことで、そのことさえ十分に心得ていれば、無用の努力、無用の虚栄心（きやうしん）【自分を実力以上に見せようとする心】、または無用の劣等感（れつとうかん）をはぶき、時間のむだをはぶくことができるでしょう。だれにもわかりにくい本というのがあります。私にはわかりにくいけれども、ほかの人にはわかりやすい本というのがあります。また最後に、だれにもわかりやすい本というのがあつてよいでしょう。

そもそも、だれにもわかりにくい、むずかしい本とは、いったいどんな本でしょうか。

それでも、文学以外の本については、たとえば技術的な専門の本については、へたな文章を多少辛抱しなければならぬ場合もあるでしょう。その本のなかには、ほかで得られない資料があるかもしれません。しかし、少なくとも文学に関するかぎり、②そういうことはないといつてよろしい。香川景樹流に言えば、文章のじょうずを前提とするはずの文学に、あまりむずかしい本のあるわけがないのです。そういうえば、西鶴さいかくの文章はどうか、『源氏』の文章はどうか、という人があるかもしれません。それはたしかに今日の私たちにはむずかしい。

— 2 —

たいしてむずかしいものではなかったらうと想像されます。いまではそれが、私たちにとってむずかしいものになっている。これは本来西鶴や『源氏』の文章がむずかしかったかどうかとは、いちおう別の問題です。英語を学ばずに英語の小説をむずかしいといっても意味をなさないと同じように、平安朝の言葉を学ばずに『源氏物語』をむずかしいといっても、まったく意味をなしません。しかし現代文学の場合には話が違います。私たちのために書かれた文章が私たちにとってあまりむずかしいならば、その文章は文学とはいえないでしょう。読む必要はありません。

「文は人なり」ということがあります。また、もつとはつきりした言葉で、一七世紀のフランスの詩人ボアロオ（一六三六—一七一）は「よく考えられたことは明瞭に【はつきりと】表現される」といいました。文章がいまいなのは、多くの場合に、単なる技術面ばかりではなく、言おうとすることを筆者がよく考えていなかったということ、あるいは文章の内容を、作者自身が十分に理解していなかったということを意味するでしょう。筆者本人さえよく理解していない内容を、読者がどうして十分に理解することができるでしょうか。

私たちがよく知っている例でも、（C）、だれにもわかりようのない西洋哲学の翻訳書などがあります。訳者がドイツ語をよく知らないか、哲学的思考に慣れていないか、あるいはたぶんその両方で、原文を十分に理解しないままに、日本語に置きかえているという場合が少なくありません。その訳文から原文を想像し、原文の言おうとしたことを推察するのは、あまりにむずかしい、ほとんど不可能に近いことです。そういう場合には、その本を読むことをやめて、もつとよい翻訳をさがしたほうが合理的【理屈に合っていること】でしょう。

たとえば仏文学者の平井啓之さん（一九二—一九二二）は、ジャン＝ポール・サルトルを理解するのに、フッサール（ドイツの哲学者、一八五九—一九三八）の現象学を読んでおく必要があると考え、その邦訳【日本語訳】を読みだしたが、なんのことかわからない。そこで仏訳を読んでみたら、はじめて氷解【わかること】したということです。そういう例はいくらでもあるでしょう。正宗白鳥さん（一八七九—一九六二）が、『源氏物語』はウェイリー（イギリスの作家・評論家、一八八九—一九六六）の英訳で読んだほうがおもしろい、といったのは有名な話です。『源氏』の場合は少し話が違いますが、ドイツの哲学を読む

のに、もしドイツ語を自由に読むことができないとすれば、邦訳を読むよりも英訳を読んだほうが、少なくとも時間の経済になることは多いようです。平井さんがフランス語を読むように、あるいは私が英語を読むように、西洋語を読めない場合には、どうしたらよいでしょうか。なにも心配なことではない。要するに西洋哲学の本を読まないことにすれば、よろしい。ハムレット曰く、「どうせ世の中には、哲学でわからぬことがたくさんある」。ドイツ観念論哲学のほかにも、汗牛充棟【書物が非常に多いこと】のたとえ、本はいくらでもあるのです。

また、たとえば大学新聞に発表される最新式の政治社会理論といったものは、しばしば、私たちの理解を絶していることがあります。

I 慣れぬ抽象的【具体的でないこと】な言葉がたくさん出てきて、どこがどこへつづくかわからない。そこで、大学生の息子をもつ母親が、彼らの世界をよりよく理解したいと考えて、参考のためにそういうものを読むとしよう。いくら読んでもどういう意味かわからない。おそらく、その婦人は自分の知的能力の限界を感じ、これでは自分の息子の考えていることもわからないだろう、と思うようになるかもしれません。

しかし、ほんとうに、そこで問題なのは、その婦人の知的能力の限界ではなくて、そういう論文を書いた筆者である学生の知的能力の限界です。社会科学のもっともらしい言葉が無数にくり出されてきて、それぞれの言葉の定義がきらかでなく、整理もつかず、つじつまも合わず、なにを言っているのかだれにもわからないというのは、筆者の頭の混乱を示していても、けっして読者の頭の混乱を示しているわけではありません。論文を書いている本人によくわかっていないことが、それを読む他人にわかる道理はないでしょう。こういうのはほんの一例にすぎず、あまりよくわかっていないことを書き、したがって、ボアロオの言ったように、文章の明晰【せき】はつきりしていること【でない著者は、なにも翻訳業者にかぎりません。総合雑誌の気分的には血沸き肉躍る【あわど】気持ちが高ぶること】大論文にも、論理的にはあいまいなのが少なくないようです。そういう論文はむずかしい。むずかしい論文ははよく。その結果、注意して読むものは、ほとんどすべてわかるように読書計画を立てるといふことは、すべての読者にすすめられる精神的衛生法です。

くわしく読んでみなくても、およそ論文の類を、むずかしそうだから読まずにといったほうがよからうと判断することができ

る。そのためには、いくつかの便法があります。その便法のなかで一番簡単な一つは、およそ字面^{じづら}をながめて「かたかな」のあまりに多いのや、また、漢字を長く連ねた部分の多いのは、なるべく避けて読まないようにすることです。だれでも知っているように、「かたかな」は、ふつう II を表記するのに使われています。私は、それがはや読み法にとって便利だと思いました。しかし、その場合の「かたかな」は、ウイスキーとか、レインコートとかいう、実生活にもながめ、手にも触れ、口にも味わってみることのできるものです。ところが、字面にばらまかれた「かたかな」が、なにやら抽象的な概念^{がひ}「物事の意味内容」を意味しているときには、それがほんとうになにを意味しているのかを決めることは、ほとんどつねに、たいへんむずかしいのです。「アンビヴァレンツな感情」「問題意識のアクチュアリティ」「中村真一郎^{ちゅうむらみさお}におけるドウンケルなもの」など。そういう「かたかな」書きの II は、英語であつても、けつしてオックスフォード辞典に説明されている意味では使われず、フランス語であつても、リットレー辞典に説明せられているような意味では使われていません。

それならば、どういう意味で使われているのか。定義があるようでない。どうすればほんとうの意味をつきとめることができるのか、だれにもわかりません。「中村真一郎におけるドウンケルなもの」とは、ドイツ語の「暗い」という意味の形容詞 dunkel のことらしい。このドイツ語形容詞のほうには、たねもしかめもないでしょう。とすれば「暗い」というしごく簡単な形容詞を、わざわざ日本語のなかでドイツ語にした理由もわからないでしょう。読みながら、これは筆者が「ドウンケル」を「暗い」とは別の意味に使っているらしいと考えないわけにゆきません。しかし、この「ドウンケル」があたりまえの「暗い」でないといすれば、いったいなんなのか、とてもわからない。プロックハウス辞典などをもち出して、とうてい III がたたないのです。そういうあいまいな概念^{がひ}がたびたび用いられているとすれば、苦勞してわかうとするだけの値うちのある綿密な思考が、そこに展開されている可能性は、あまり多くはないでしょう。読まなくても、おそらく損はしない。

また、漢字がとめどもなくつながり、「絶対矛盾^{むじはん}の自己同一」というふうにつながっていると、そのどれがどこで切れるのか、どの言葉がどこにかかるのか、その一つながりのなかでは決めようがありません。もちろん、前後の関係によってわかることもありましよう。しかし、そういう言い方がたびたび現れてくるとすれば、そういう文章を読むことは、ものをはつきりと

考えるための障害にはなつても、助けにはならないでしょう。そういうやり方で、ものを綿密に考える訓練を自分に課することができかどうか。言いたいことそれ自身がむずかしいから、やむを得ず「仕方なく」文章もむずかしくなっているというのは、たいていの場合に単なる口実^{くじつ}【言い訳】にすぎないようです。

日本語ではありませんが、イギリスの哲学者バートランド・ラッセルは、本来やさしい、単純なことについてだけ書いたものではありません。しかし、ラッセルはつねに水際^{みづぎ}立って【ひとときわ目立って】明快な、少しもあいまいではない文章を書いたのです。香川景樹なら、「これこそ英語の上手」といったことでしょう。

しかし、本を読んでわかるかわからぬかは、(D)、つねに本の側にだけ理由があるわけではありません。読者の側にもそれなりの理由のあることが多いのです。たとえば、ラッセルを読んで「むずかしい、よくわからない」という人もあるでしょう。また、おそらく禪問答^{ぜんもんたう}【禪宗の僧が悟りを開くために行う問答】を読んでも、よくわかった気になる人もあるでしょう。むずかしい本を読んで、いや、そもそも本を読んでよくわかる工夫は、読者の側にもなければなりません。その読者の側の条件は、第一には言葉に関し、第二には経験に關しているといつてよいでしょう。

文章による表現は、著者のなんらかの経験を、言葉の組合せに翻訳して、人に伝えようとするものだ、といつていいと思います。これを読者の側からみれば、言葉の組合せ、つまり、文章を通じて著者の経験を知ることになります。それはちやうど、自動車を運転する人が交差点で赤い信号を見れば、止まらなければならないということを思いうかべ、青い信号を見れば走りだしてもよいということを考えるのに似ています。文章はその信号の複雑になったようなものです。赤は「止まれ」、青は「進め」という信号の機能を心得ていなければ、車は運転できません。同様に、言葉がなにを意味しているかを心得ていなければ、本を読んでわかることはできません。しかし、信号の意味を知っているだけで、車を一度も止めたことのない人、走らせたことのない人は、交差点でどうすることもできないでしょう。運転手は信号の意味を知っていると同時に、実行の経験を持つていなければなりません。同じように、読者は言葉が意味するところを知っているだけでなく、言葉が意味するものがなんなのか、多かれ少なかれ、読者自身の経験に即して知っていなければ、ほんとうに文章を理解することはできない

文章を正確に理解するためには、まず単語の意味を正確に理解していなければなりません。たとえば幾何学【図形や空間を研究する学問】を習いはじめる人は、いつでも幾何学で用いられる定義からはじめるわけです。直線とは、平面とは、そういう言葉の定義を決めておいて、それから、その言葉を使って幾何学の複雑な世界が展開します。その展開のはじめから終わりまで、「直線」という言葉はつねにその定義どりのものを意味し、けつして、それ以外のなものも意味しません。もし、用いられている言葉の定義を、一つでも忘れるとすれば、幾何学を理解することは不可能になるでしょう。経済学の場合には、幾何学と同じように厳密に、そこで用いる言葉の一つ一つを定義することは困難であるかもしれません。しかし、使われている言葉の定義を、できるだけ正確に理解し、覚えておくことは、経済学の論文を読んで、わかる、わからないという場合には、決定的な役割を演じるでしょう。

経済学にかぎらず、およそ学問には、その学問の領域のなかでしか使われない特殊な言葉があつて、その言葉の意味は、できるかぎり厳密に規定されています。漫然〔物事をなんとなく行うこと〕とそれらの言葉をならべて、前後の關係から意味を想像するというだけでは、十分ではありません。そういうことを繰り返しながら、たくさんの本を読むのは、かえつて不経済なやり方でしょう。

ん。日本人だから日本語で書いてある本は読めるだろう、ということもあるでしょう。しかし、あたりまえの教養がある日本

しかし、特殊な言葉が定義されて用いられている本は、じつは、かえってわかりやすい本だといっていいでしょう。もう少し一般的な言葉で書かれていて、その大事な言葉の定義が、その本のなかでも、またそのほかのどこでも、はつきり与えられていないことがあります。社会科学の本にはそういうことが多いし、また雑誌の論文や新聞の社説にはそういうことが多いい。以前『朝日新聞』の学芸欄が「あいまいな言葉」という特集をしたことがあります。そこに拾いあげられたあいまいな言葉は、いたるところで使われています。そういう文章や本を理解するには、どうしたらよいでしょうか。「自由」といい、「民主主義」といい。また「進歩」といい、「反動」といい。「伝統」とか「文化」とか、——だれでもいちおうわかっているような気がしていて、よく考えてみると、その意味のはつきりしない言葉が、数かぎりなくあります。たとえば「税金でまかなっている大学を、国が管理するのは当然である」というときの「国」は、おそらく「国」は、日本国であるにしても、何々県であるにしても、とにかく

IV だけにはけっして自慢しないようです。

IV という意味ではないでしょう。日本人は、自分

— 8 —

いう言葉を絶えず使いながら行なわれている議論がある。そういう議論を読んでも、その意味は、結局はつきりしてこないでしょう。そうかといって、この場合には、経済学や幾何学と違って、しかるべき辞書を引き、教科書を開いて、明確で一義的【一つの意味にとらえること】な定義を容易に見いだすというわけにはゆきません。もちろん字引をひくことはできるでしょう。しかし字引の説明は、おそらく、あまりはつきりしたものではないでしょう。⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㏀ ㏁ ㏂ ㏃ ㏄ ㏅ ㏆ ㏇ ㏈ ㏉ ㏊ ㏋ ㏌ ㏍ ㏎ ㏏ ㏐ ㏑ ㏒ ㏓ ㏔ ㏕ ㏖ ㏗ ㏘ ㏙ ㏚ ㏛ ㏜ ㏝ ㏞ ㏟ ㏠ ㏡ ㏢ ㏣ ㏤ ㏥ ㏦ ㏧ ㏨ ㏩ ㏪ ㏫ ㏬ ㏭ ㏮ ㏯ ㏰ ㏱ ㏲ ㏳ ㏴ ㏵ ㏶ ㏷ ㏸ ㏹ ㏺ ㏻ ㏼ ㏽ ㏾ ㏿ 㐀 㐁 㐂 㐃 㐄 㐅 㐆 㐇 㐈 㐉 㐊 㐋 㐌 㐍 㐎 㐏 㐐 㐑 㐒 㐓 㐔 㐕 㐖 㐗 㐘 㐙 㐚 㐛 㐜 㐝 㐞 㐟 㐠 㐡 㐢 㐣 㐤 㐥 㐦 㐧 㐨 㐩 㐪 㐫 㐬 㐭 㐮 㐯 㐰 㐱 㐲 㐳 㐴 㐵 㐶 㐷 㐸 㐹 㐺 㐻 㐼 㐽 㐾 㐿 㑀 㑁 㑂 㑃 㑄 㑅 㑆 㑇 㑈 㑉 㑊 㑋 㑌 㑍 㑎 㑏 㑐 㑑 㑒 㑓 㑔 㑕 㑖 㑗 㑘 㑙 㑚 㑛 㑜 㑝 㑞 㑟 㑠 㑡 㑢 㑣 㑤 㑥 㑦 㑧 㑨 㑩 㑪 㑫 㑬 㑭 㑮 㑯 㑰 㑱 㑲 㑳 㑴 㑵 㑶 㑷 㑸 㑹 㑺 㑻 㑼 㑽 㑾 㑿 㒀 㒁 㒂 㒃 㒄 㒅 㒆 㒇 㒈 㒉 㒊 㒋 㒌 㒍 㒎 㒏 㒐 㒑 㒒 㒓 㒔 㒕 㒖 㒗 㒘 㒙 㒚 㒛 㒜 㒝 㒞 㒟 㒠 㒡 㒢 㒣 㒤 㒥 㒦 㒧 㒨 㒩 㒪 㒫 㒬 㒭 㒮 㒯 㒰 㒱 㒲 㒳 㒴 㒵 㒶 㒷 㒸 㒹 㒺 㒻 㒼 㒽 㒾 㒿 㓀 㓁 㓂 㓃 㓄 㓅 㓆 㓇 㓈 㓉 㓊 㓋 㓌 㓍 㓎 㓏 㓐 㓑 㓒 㓓 㓔 㓕 㓖 㓗 㓘 㓙 㓚 㓛 㓜 㓝 㓞 㓟 㓠 㓡 㓢 㓣 㓤 㓥 㓦 㓧 㓨 㓩 㓪 㓫 㓬 㓭 㓮 㓯 㓰 㓱 㓲 㓳 㓴 㓵 㓶 㓷 㓸 㓹 㓺 㓻 㓼 㓽 㓾 㓿 㔀 㔁 㔂 㔃 㔄 㔅 㔆 㔇 㔈 㔉 㔊 㔋 㔌 㔍 㔎 㔏 㔐 㔑 㔒 㔓 㔔 㔕 㔖 㔗 㔘 㔙 㔚 㔛 㔜 㔝 㔞 㔟 㔠 㔡 㔢 㔣 㔤 㔥 㔦 㔧 㔨 㔩 㔪 㔫 㔬 㔭 㔮 㔯 㔰 㔱 㔲 㔳 㔴 㔵 㔶 㔷 㔸 㔹 㔺 㔻 㔼 㔽 㔾 㔿 㕀 㕁 㕂 㕃 㕄 㕅 㕆 㕇 㕈 㕉 㕊 㕋 㕌 㕍 㕎 㕏 㕐 㕑 㕒 㕓 㕔 㕕 㕖 㕗 㕘 㕙 㕚 㕛 㕜 㕝 㕞 㕟 㕠 㕡 㕢 㕣 㕤 㕥 㕦 㕧 㕨 㕩 㕪 㕫 㕬 㕭 㕮 㕯 㕰 㕱 㕲 㕳 㕴 㕵 㕶 㕷 㕸 㕹 㕺 㕻 㕼 㕽 㕾 㕿 㖀 㖁 㖂 㖃 㖄 㖅 㖆 㖇 㖈 㖉 㖊 㖋 㖌 㖍 㖎 㖏 㖐 㖑 㖒 㖓 㖔 㖕 㖖 㖗 㖘 㖙 㖚 㖛 㖜 㖝 㖞 㖟 㖠 㖡 㖢 㖣 㖤 㖥 㖦 㖧 㖨 㖩 㖪 㖫 㖬 㖭 㖮 㖯 㖰 㖱 㖲 㖳 㖴 㖵 㖶 㖷 㖸 㖹 㖺 㖻 㖼 㖽 㖾 㖿 㗀 㗁 㗂 㗃 㗄 㗅 㗆 㗇 㗈 㗉 㗊 㗋 㗌 㗍 㗎 㗏 㗐 㗑 㗒 㗓 㗔 㗕 㗖 㗗 㗘 㗙 㗚 㗛 㗜 㗝 㗞 㗟 㗠 㗡 㗢 㗣 㗤 㗥 㗦 㗧 㗨 㗩 㗪 㗫 㗬 㗭 㗮 㗯 㗰 㗱 㗲 㗳 㗴 㗵 㗶 㗷 㗸 㗹 㗺 㗻 㗼 㗽 㗾 㗿 㘀 㘁 㘂 㘃 㘄 㘅 㘆 㘇 㘈 㘉 㘊 㘋 㘌 㘍 㘎 㘏 㘐 㘑 㘒 㘓 㘔 㘕 㘖 㘗 㘘 㘙 㘚 㘛 㘜 㘝 㘞 㘟 㘠 㘡 㘢 㘣 㘤 㘥 㘦 㘧 㘨 㘩 㘪 㘫 㘬 㘭 㘮 㘯 㘰 㘱 㘲 㘳 㘴 㘵 㘶 㘷 㘸 㘹 㘺 㘻 㘼 㘽 㘾 㘿 㙀 㙁 㙂 㙃 㙄 㙅 㙆 㙇 㙈 㙉 㙊 㙋 㙌 㙍 㙎 㙏 㙐 㙑 㙒 㙓 㙔 㙕 㙖 㙗 㙘 㙙 㙚 㙛 㙜 㙝 㙞 㙟 㙠 㙡 㙢 㙣 㙤 㙥 㙦 㙧 㙨 㙩 㙪 㙫 㙬 㙭 㙮 㙯 㙰 㙱 㙲 㙳 㙴 㙵 㙶 㙷 㙸 㙹 㙺 㙻 㙼 㙽 㙾 㙿 㚀 㚁 㚂 㚃 㚄 㚅 㚆 㚇 㚈 㚉 㚊 㚋 㚌 㚍 㚎 㚏 㚐 㚑 㚒 㚓 㚔 㚕 㚖 㚗 㚘 㚙 㚚 㚛 㚜 㚝 㚞 㚟 㚠 㚡 㚢 㚣 㚤 㚥 㚦 㚧 㚨 㚩 㚪 㚫 㚬 㚭 㚮 㚯 㚰 㚱 㚲 㚳 㚴 㚵 㚶 㚷 㚸 㚹 㚺 㚻 㚼 㚽 㚾 㚿 㜀 㜁 㜂 㜃 㜄 㜅 㜆 㜇 㜈 㜉 㜊 㜋 㜌 㜍 㜎 㜏 㜐 㜑 㜒 㜓 㜔 㜕 㜖 㜗 㜘 㜙 㜚 㜛 㜜 㜝 㜞 㜟 㜠 㜡 㜢 㜣 㜤 㜥 㜦 㜧 㜨 㜩 㜪 㜫 㜬 㜭 㜮 㜯 㜰 㜱 㜲 㜳 㜴 㜵 㜶 㜷 㜸 㜹 㜺 㜻 㜼 㜽 㜾 㜿 㝀 㝁 㝂 㝃 㝄 㝅 㝆 㝇 㝈 㝉 㝊 㝋 㝌 㝍 㝎 㝏 㝐 㝑 㝒 㝓 㝔 㝕 㝖 㝗 㝘 㝙 㝚 㝛 㝜 㝝 㝞 㝟 㝠 㝡 㝢 㝣 㝤 㝥 㝦 㝧 㝨 㝩 㝪 㝫 㝬 㝭 㝮 㝯 㝰 㝱 㝲 㝳 㝴 㝵 㝶 㝷 㝸 㝹 㝺 㝻 㝼 㝽 㝾 㝿 㞀 㞁 㞂 㞃 㞄 㞅 㞆 㞇 㞈 㞉 㞊 㞋 㞌 㞍 㞎 㞏 㞐 㞑 㞒 㞓 㞔 㞕 㞖 㞗 㞘 㞙 㞚 㞛 㞜 㞝 㞞 㞟 㞠 㞡 㞢 㞣 㞤 㞥 㞦 㞧 㞨 㞩 㞪 㞫 㞬 㞭 㞮 㞯 㞰 㞱 㞲 㞳 㞴 㞵 㞶 㞷 㞸 㞹 㞺 㞻 㞼 㞽 㞾 㞿 㟀 㟁 㟂 㟃 㟄 㟅 㟆 㟇 㟈 㟉 㟊 㟋 㟌 㟍 㟎 㟏 㟐 㟑 㟒 㟓 㟔 㟕 㟖 㟗 㟘 㟙 㟚 㟛 㟜 㟝 㟞 㟟 㟠 㟡 㟢 㟣 㟤 㟥 㟦 㟧 㟨 㟩 㟪 㟫 㟬 㟭 㟮 㟯 㟰 㟱 㟲 㟳 㟴 㟵 㟶 㟷 㟸 㟹 㟺 㟻 㟼 㟽 㟾 㟿 㠀 㠁 㠂 㠃 㠄 㠅 㠆 㠇 㠈 㠉 㠊 㠋 㠌 㠍 㠎 㠏 㠐 㠑 㠒 㠓 㠔 㠕 㠖 㠗 㠘 㠙 㠚 㠛 㠜 㠝 㠞 㠟 㠠 㠡 㠢 㠣 㠤 㠥 㠦 㠧 㠨 㠩 㠪 㠫 㠬 㠭 㠮 㠯 㠰 㠱 㠲 㠳 㠴 㠵 㠶 㠷 㠸 㠹 㠺 㠻 㠼 㠽 㠾 㠿 㡀 㡁 㡂 㡃 㡄 㡅 㡆 㡇 㡈 㡉 㡊 㡋 㡌 㡍 㡎 㡏 㡐 㡑 㡒 㡓 㡔 㡕 㡖 㡗 㡘 㡙 㡚 㡛 㡜 㡝 㡞 㡟 㡠 㡡 㡢 㡣 㡤 㡥 㡦 㡧 㡨 㡩 㡪 㡫 㡬 㡭 㡮 㡯 㡰 㡱 㡲 㡳 㡴 㡵 㡶 㡷 㡸 㡹 㡺 㡻 㡼 㡽 㡾 㡿 㢀 㢁 㢂 㢃 㢄 㢅 㢆 㢇 㢈 㢉 㢊 㢋 㢌 㢍 㢎 㢏 㢐 㢑 㢒 㢓 㢔 㢕 㢖 㢗 㢘 㢙 㢚 㢛 㢜 㢝 㢞 㢟 㢠 㢡 㢢 㢣 㢤 㢥 㢦 㢧 㢨 㢩 㢪 㢫 㢬 㢭 㢮 㢯 㢰 㢱 㢲 㢳 㢴 㢵 㢶 㢷 㢸 㢹 㢺 㢻 㢼 㢽 㢾 㢿 㣀 㣁 㣂 㣃 㣄 㣅 㣆 㣇 㣈 㣉 㣊 㣋 㣌 㣍 㣎 㣏 㣐 㣑 㣒 㣓 㣔 㣕 㣖 㣗 㣘 㣙 㣚 㣛 㣜 㣝 㣞 㣟 㣠 㣡 㣢 㣣 㣤 㣥 㣦 㣧 㣨 㣩 㣪 㣫 㣬 㣭 㣮 㣯 㣰 㣱 㣲 㣳 㣴 㣵 㣶 㣷 㣸 㣹 㣺 㣻 㣼 㣽 㣾 㣿 㤀 㤁 㤂 㤃 㤄 㤅 㤆 㤇 㤈 㤉 㤊 㤋 㤌 㤍 㤎 㤏 㤐 㤑 㤒 㤓 㤔 㤕 㤖 㤗 㤘 㤙 㤚 㤛 㤜 㤝 㤞 㤟 㤠 㤡 㤢 㤣 㤤 㤥 㤦 㤧 㤨 㤩 㤪 㤫 㤬 㤭 㤮 㤯 㤰 㤱 㤲 㤳 㤴 㤵 㤶 㤷 㤸 㤹 㤺 㤻 㤼 㤽 㤾 㤿 㥀 㥁 㥂 㥃 㥄 㥅 㥆 㥇 㥈 㥉 㥊 㥋 㥌 㥍 㥎 㥏 㥐 㥑 㥒 㥓 㥔 㥕 㥖 㥗 㥘 㥙 㥚 㥛 㥜 㥝 㥞 㥟 㥠 㥡 㥢 㥣 㥤 㥥 㥦 㥧 㥨 㥩 㥪 㥫 㥬 㥭 㥮 㥯 㥰 㥱 㥲 㥳 㥴 㥵 㥶 㥷 㥸 㥹 㥺 㥻 㥼 㥽 㥾 㥿 㦀 㦁 㦂 㦃 㦄 㦅 㦆 㦇 㦈 㦉 㦊 㦋 㦌 㦍 㦎 㦏 㦐 㦑 㦒 㦓 㦔 㦕 㦖 㦗 㦘 㦙 㦚 㦛 㦜 㦝 㦞 㦟 㦠 㦡 㦢 㦣 㦤 㦥 㦦 㦧 㦨 㦩 㦪 㦫 㦬 㦭 㦮 㦯 㦰 㦱 㦲 㦳 㦴 㦵 㦶 㦷 㦸 㦹 㦺 㦻 㦼 㦽 㦾 㦿 㧀 㧁 㧂 㧃 㧄 㧅 㧆 㧇 㧈 㧉 㧊 㧋 㧌 㧍 㧎 㧏 㧐 㧑 㧒 㧓 㧔 㧕 㧖 㧗 㧘 㧙 㧚 㧛 㧜 㧝 㧞 㧟 㧠 㧡 㧢 㧣 㧤 㧥 㧦 㧧 㧨 㧩 㧪 㧫 㧬 㧭 㧮 㧯 㧰 㧱 㧲 㧳 㧴 㧵 㧶 㧷 㧸 㧹 㧺 㧻 㧼 㧽 㧾 㧿 㨀 㨁 㨂 㨃 㨄 㨅 㨆 㨇 㨈 㨉 㨊 㨋 㨌 㨍 㨎 㨏 㨐 㨑 㨒 㨓 㨔 㨕 㨖 㨗 㨘 㨙 㨚 㨛 㨜 㨝 㨞 㨟 㨠 㨡 㨢 㨣 㨤 㨥 㨦 㨧 㨨 㨩 㨪 㨫 㨬 㨭 㨮 㨯 㨰 㨱 㨲 㨳 㨴 㨵 㨶 㨷 㨸 㨹 㨺 㨻 㨼 㨽 㨾 㨿 㩀 㩁 㩂 㩃 㩄 㩅 㩆 㩇 㩈 㩉 㩊 㩋 㩌 㩍 㩎 㩏 㩐 㩑 㩒 㩓 㩔 㩕 㩖 㩗 㩘 㩙 㩚 㩛 㩜 㩝 㩞 㩟 㩠 㩡 㩢 㩣 㩤 㩥 㩦 㩧 㩨 㩩 㩪 㩫 㩬 㩭 㩮 㩯 㩰 㩱 㩲 㩳 㩴 㩵 㩶 㩷 㩸 㩹 㩺 㩻 㩼 㩽 㩾 㩿 㪀 㪁 㪂 㪃 㪄 㪅 㪆 㪇 㪈 㪉 㪊 㪋 㪌 㪍 㪎 㪏 㪐 㪑 㪒 㪓 㪔 㪕 㪖 㪗 㪘 㪙 㪚 㪛 㪜 㪝 㪞 㪟 㪠 㪡 㪢 㪣 㪤 㪥 㪦 㪧 㪨 㪩 㪪 㪫 㪬 㪭 㪮 㪯 㪰 㪱 㪲 㪳 㪴 㪵 㪶 㪷 㪸 㪹 㪺 㪻 㪼 㪽 㪾 㪿 㫀 㫁 㫂 㫃 㫄 㫅 㫆 㫇 㫈 㫉 㫊 㫋 㫌 㫍 㫎 㫏 㫐 㫑 㫒 㫓 㫔 㫕 㫖 㫗 㫘 㫙 㫚 㫛 㫜 㫝 㫞 㫟 㫠 㫡 㫢 㫣 㫤 㫥 㫦 㫧 㫨 㫩 㫪 㫫 㫬 㫭 㫮 㫯 㫰 㫱 㫲 㫳 㫴 㫵 㫶 㫷 㫸 㫹 㫺 㫻 㫼 㫽 㫾 㫿 㬀 㬁 㬂 㬃 㬄 㬅 㬆 㬇 㬈 㬉 㬊 㬋 㬌 㬍 㬎 㬏 㬐 㬑 㬒 㬓 㬔 㬕 㬖 㬗 㬘 㬙 㬚 㬛 㬜 㬝 㬞 㬟 㬠 㬡 㬢 㬣 㬤 㬥 㬦 㬧 㬨 㬩 㬪 㬫 㬬 㬭 㬮 㬯 㬰 㬱 㬲 㬳 㬴 㬵 㬶 㬷 㬸 㬹 㬺 㬻 㬼 㬽 㬾 㬿 㭀 㭁 㭂 㭃 㭄 㭅 㭆 㭇 㭈 㭉 㭊 㭋 㭌 㭍 㭎 㭏 㭐 㭑 㭒 㭓 㭔 㭕 㭖 㭗 㭘 㭙 㭚 㭛 㭜 㭝 㭞 㭟 㭠 㭡 㭢 㭣 㭤 㭥 㭦 㭧 㭨 㭩 㭪 㭫 㭬 㭭 㭮 㭯 㭰 㭱 㭲 㭳 㭴 㭵 㭶 㭷 㭸 㭹 㭺 㭻 㭼 㭽 㭾 㭿 㮀 㮁 㮂 㮃 㮄 㮅 㮆 㮇 㮈 㮉 㮊 㮋 㮌 㮍 㮎 㮏 㮐 㮑 㮒 㮓 㮔 㮕 㮖 㮗 㮘 㮙 㮚 㮛 㮜 㮝 㮞 㮟 㮠 㮡 㮢 㮣 㮤 㮥 㮦 㮧 㮨 㮩 㮪 㮫 㮬 㮭 㮮 㮯 㮰 㮱 㮲 㮳 㮴 㮵 㮶 㮷 㮸 㮹 㮺 㮻 㮼 㮽 㮾 㮿 㯀 㯁 㯂 㯃 㯄 㯅 㯆 㯇 㯈 㯉 㯊 㯋 㯌 㯍 㯎 㯏 㯐 㯑 㯒 㯓 㯔 㯕 㯖 㯗 㯘 㯙 㯚 㯛 㯜 㯝 㯞 㯟 㯠 㯡 㯢 㯣 㯤 㯥 㯦 㯧 㯨 㯩 㯪 㯫 㯬 㯭 㯮 㯯 㯰 㯱 㯲 㯳 㯴 㯵 㯶 㯷 㯸 㯹 㯺 㯻 㯼 㯽 㯾 㯿 㰀 㰁 㰂 㰃 㰄 㰅 㰆 㰇 㰈 㰉 㰊 㰋 㰌 㰍 㰎 㰏 㰐 㰑 㰒 㰓 㰔 㰕 㰖 㰗 㰘 㰙 㰚 㰛 㰜 㰝 㰞 㰟 㰠 㰡 㰢 㰣 㰤 㰥 㰦 㰧 㰨 㰩 㰪 㰫 㰬 㰭 㰮 㰯 㰰 㰱 㰲 㰳 㰴 㰵 㰶 㰷 㰸 㰹 㰺 㰻 㰼 㰽 㰾 㰿 㱀 㱁 㱂 㱃 㱄 㱅 㱆 㱇 㱈 㱉 㱊 㱋 㱌 㱍 㱎 㱏 㱐 㱑 㱒 㱓 㱔 㱕 㱖 㱗 㱘 㱙 㱚 㱛 㱜 㱝 㱞 㱟 㱠 㱡 㱢 㱣 㱤 㱥 㱦 㱧 㱨 㱩 㱪 㱫 㱬 㱭 㱮 㱯 㱰 㱱 㱲 㱳 㱴 㱵 㱶 㱷 㱸 㱹 㱺 㱻 㱼 㱽 㱾 㱿 㲀 㲁 㲂 㲃 㲄 㲅 㲆 㲇 㲈 㲉 㲊 㲋 㲌 㲍 㲎 㲏 㲐 㲑 㲒 㲓 㲔 㲕 㲖 㲗 㲘 㲙 㲚 㲛 㲜 㲝 㲞 㲟 㲠 㲡 㲢 㲣 㲤 㲥 㲦 㲧 㲨 㲩 㲪 㲫 㲬 㲭 㲮 㲯 㲰 㲱 㲲 㲳 㲴 㲵 㲶 㲷 㲸 㲹 㲺 㲻 㲼 㲽 㲾 㲿 㳀 㳁 㳂 㳃 㳄 㳅 㳆 㳇 㳈 㳉 㳊 㳋 㳌 㳍 㳎 㳏 㳐 㳑 㳒 㳓 㳔 㳕 㳖 㳗 㳘 㳙 㳚 㳛 㳜 㳝 㳞 㳟 㳠 㳡 㳢 㳣 㳤 㳥 㳦 㳧 㳨 㳩 㳪 㳫 㳬 㳭 㳮 㳯 㳰 㳱 㳲 㳳 㳴 㳵 㳶 㳷 㳸 㳹 㳺 㳻 㳼 㳽 㳾 㳿 㴀 㴁 㴂 㴃 㴄 㴅 㴆 㴇 㴈 㴉 㴊 㴋 㴌 㴍 㴎 㴏 㴐 㴑 㴒 㴓 㴔 㴕 㴖 㴗 㴘 㴙 㴚 㴛 㴜 㴝 㴞 㴟 㴠 㴡 㴢 㴣 㴤 㴥 㴦 㴧 㴨 㴩 㴪 㴫 㴬 㴭 㴮 㴯 㴰 㴱 㴲 㴳 㴴 㴵 㴶 㴷 㴸 㴹 㴺 㴻 㴼 㴽 㴾 㴿 㵀 㵁 㵂 㵃 㵄 㵅 㵆 㵇 㵈 㵉 㵊 㵋 㵌 㵍 㵎 㵏 㵐 㵑 㵒 㵓 㵔 㵕 㵖 㵗 㵘 㵙 㵚 㵛 㵜 㵝 㵞 㵟 㵠 㵡 㵢 㵣 㵤 㵥 㵦 㵧 㵨 㵩 㵪 㵫 㵬 㵭 㵮 㵯 㵰 㵱 㵲 㵳 㵴 㵵 㵶 㵷 㵸 㵹 㵺 㵻 㵼 㵽 㵾 㵿 㶀 㶁 㶂 㶃 㶄 㶅 㶆 㶇 㶈 㶉 㶊 㶋 㶌 㶍 㶎 㶏 㶐 㶑 㶒 㶓 㶔 㶕 㶖 㶗 㶘 㶙 㶚 㶛 㶜 㶝 㶞 㶟 㶠 㶡 㶢 㶣 㶤 㶥 㶦 㶧 㶨 㶩 㶪 㶫 㶬 㶭 㶮 㶯 㶰 㶱 㶲 㶳 㶴 㶵 㶶 㶷 㶸 㶹 㶺 㶻 㶼 㶽 㶾 㶿 㷀 㷁 㷂 㷃 㷄 㷅 㷆 㷇 㷈 㷉 㷊 㷋 㷌 㷍 㷎 㷏 㷐 㷑 㷒 㷓 㷔 㷕 㷖 㷗 㷘 㷙 㷚 㷛 㷜 㷝 㷞 㷟 㷠 㷡 㷢 㷣 㷤 㷥 㷦 㷧 㷨 㷩 㷪 㷫 㷬 㷭 㷮 㷯 㷰 㷱 㷲 㷳 㷴 㷵 㷶 㷷 㷸 㷹 㷺 㷻 㷼 㷽 㷾 㷿 㸀 㸁 㸂 㸃 㸄 㸅 㸆 㸇 㸈 㸉 㸊 㸋 㸌 㸍 㸎 㸏 㸐 㸑 㸒 㸓 㸔 㸕 㸖 㸗 㸘 㸙 㸚 㸛 㸜 㸝 㸞 㸟 㸠 㸡 㸢 㸣 㸤 㸥 㸦 㸧 㸨 㸩 㸪 㸫 㸬 㸭 㸮 㸯 㸰 㸱 㸲 㸳 㸴 㸵 㸶 㸷 㸸 㸹 㸺 㸻 㸼 㸽 㸾 㸿 㹀 㹁 㹂 㹃 㹄 㹅 㹆 㹇 㹈 㹉 㹊 㹋 㹌 㹍 㹎 㹏 㹐 㹑 㹒 㹓 㹔 㹕 㹖 㹗 㹘 㹙 㹚 㹛 㹜 㹝 㹞 㹟 㹠 㹡 㹢 㹣 㹤 㹥 㹦 㹧 㹨 㹩 㹪 㹫 㹬 㹭 㹮 㹯 㹰 㹱 㹲 㹳 㹴 㹵 㹶 㹷 㹸 㹹 㹺 㹻 㹼 㹽 㹾 㹿 㺀 㺁 㺂 㺃 㺄 㺅 㺆 㺇 㺈 㺉 㺊 㺋 㺌 㺍 㺎 㺏 㺐 㺑 㺒 㺓 㺔 㺕 㺖 㺗 㺘 㺙 㺚 㺛 㺜 㺝 㺞 㺟 㺠 㺡 㺢 㺣 㺤 㺥 㺦 㺧 㺨 㺩 㺪 㺫 㺬 㺭 㺮 㺯 㺰 㺱 㺲 㺳 㺴 㺵 㺶 㺷 㺸 㺹 㺺 㺻 㺼 㺽 㺾 㺿 㻀 㻁 㻂 㻃 㻄 㻅 㻆 㻇 㻈 㻉 㻊 㻋 㻌 㻍 㻎 㻏 㻐 㻑 㻒 㻓 㻔 㻕 㻖 㻗 㻘 㻙 㻚 㻛 㻜 㻝 㻞 㻟 㻠 㻡 㻢 㻣 㻤 㻥 㻦 㻧 㻨 㻩 㻪 㻫 㻬 㻭 㻮 㻯 㻰 㻱 㻲 㻳 㻴 㻵 㻶 㻷 㻸 㻹 㻺 㻻 㻼 㻽 㻾 㻿 㼀 㼁 㼂 㼃 㼄 㼅 㼆 㼇 㼈 㼉 㼊 㼋 㼌 㼍 㼎 㼏 㼐 㼑 㼒 㼓 㼔 㼕 㼖 㼗 㼘 㼙 㼚 㼛 㼜 㼝 㼞 㼟 㼠 㼡 㼢 㼣 㼤 㼥 㼦 㼧 㼨 㼩 㼪 㼫 㼬 㼭 㼮 㼯 㼰 㼱 㼲 㼳 㼴 㼵 㼶 㼷 㼸 㼹 㼺 㼻 㼼 㼽 㼾 㼿 㽀 㽁 㽂 㽃 㽄 㽅 㽆 㽇 㽈 㽉 㽊 㽋 㽌 㽍 㽎 㽏 㽐 㽑 㽒 㽓 㽔 㽕 㽖 㽗 㽘 㽙 㽚 㽛 㽜 㽝 㽞 㽟 㽠 㽡 㽢 㽣 㽤 㽥 㽦 㽧 㽨 㽩 㽪 㽫 㽬 㽭 㽮 㽯 㽰 㽱 㽲 㽳 㽴 㽵 㽶 㽷 㽸 㽹 㽺 㽻 㽼 㽽 㽾 㽿 㿀 㿁 㿂 㿃 㿄 㿅 㿆 㿇 㿈 㿉 㿊 㿋 㿌 㿍 㿎 㿏 㿐 㿑 㿒 㿓 㿔 㿕 㿖 㿗 㿘 㿙 㿚 㿛 㿜 㿝 㿞 㿟 㿠 㿡 㿢 㿣 㿤 㿥 㿦 㿧 㿨 㿩 㿪 㿫 㿬 㿭 㿮 㿯 㿰 㿱 㿲 㿳 㿴 㿵 㿶 㿷 㿸 㿹 㿺 㿻 㿼 㿽 㿾 㿿 㺀 㺁 㺂 㺃 㺄 㺅 㺆 㺇 㺈 㺉 㺊 㺋 㺌 㺍 㺎

る。実習しなかったところを教科書だけで理解し、覚えようすると、じつにむずかしく、じつに退屈^くでした。どうも「いわく言いがたし」【簡単には説明できない】というところが、たいいていの本にはあるようです。人情の機微^ひ【微妙^{みょう}な心の動き】にかぎらず、人骨の機微^ひにおいてさえそうなのだから、こちらの経験に通じる本をよく読み、通じない本を無視するほか

V

がないかと思われます。

たとえば、小林秀雄^{ひでお}さん（一九〇二—一八三）の『鉄斎^{てつさい}』についての一書を読んで、よくわかる人もあり、よくわからない人もあるでしょう。むずかしいと思う人もあり、やさしいと思う人もありましよう。どうして人によってそういうわかり方の違い、むずかしさの違いが出てくるかといえば、それは、小林さんが使っている言葉の定義をどの程度まで正確に知っているかというのではなくて、読者がどの程度に「鉄斎」を見ているか、つまり、読者の側での絵を見るという経験の有無、あるいはその深淺によるでしょう。これは幾何学教科書の場合とよほど違った事情です。初等幾何学教科書がむずかしい、またはやさしいというのと、小林さんの『鉄斎』がやさしい、むずかしいというのは、意味がかなり違っているように思われます。小林さんの『鉄斎』の場合は、読者が一つの文句を読んで、その表現の意味がいちおうわかっただけでは、じつはなんにもわかっていないということになる。（富岡鉄斎^{おか}、南画家、近代日本画壇^{だん}の巨匠^{しやう}、一八三六—一九二四）

ほんとうにわかるということは、その文章を読んでただ単におもしろがるというのではなく、なぜ小林さんが、そこでそういうことを言っているのか、納得がゆくということでしょう。

「なぜこの定理から、この系【つながりやまとまり】が出てくるか」——それは論理の問題であり、論理の問題は言葉で言い表わすことができます。

「なぜこの第一印象のあとに、この感想が出てくるか」——それは論理の問題よりも、著者の

VI

の質の問題です。

の質は、けっして言葉によって十分に表わすことができません。想像するほかはない。想像することができなければ、二つの文章はつながってこないでしょう。

読者は読みながら、文章を通して、その背景に、うしろ側からその文章を支えている著者の経験を感じなければなりません。

ん。しかし、そういうことを感じるためには、読者自身が著者の経験とほとんど同じ種類の経験をあらかじめ持つていなければならぬでしょう。ほんとうのむずかしさは、そこにあります。そのむずかしさを乗りこえる道は、ただ一つ、その絵を見て、同じ種類の経験を自分のものにするだけです。

別な言葉でいえば、幾何学教科書は「理性が万人^{ばんにん}に等しく分かち与えられている」かぎりで、すべての人に向けられたものです。だれでも落ちついて十分に考え、十分に練習すれば、残るくまなく、そのすべてがわかるはずのものでしょう。しかし、小林秀雄さんの『鉄斎』は万人に向けられたものではなく、「鉄斎」を見たことのある人、あるいは、少なくとも小林さんが「鉄斎」を見たときの経験と同一ような種類の経験を、ほかの画家を通じて持ったことのある人だけに向けて書かれたものです。だれにもわかるものではない。本来、わからない人があつて当然のものです。読者の立場からいえば、小林さんの『鉄斎』のようなのは、もし「鉄斎」を一度も見ることがなければ、はじめから読まないほうがいいだろうと思います。

要するに見たことのない絵に関する本を読むのは、その本がむずかしいか、むずかしくないかというより、原則としては不可能なことでしょう。同じように、聞いたことのない音楽について本を読んでみても、純粹^{すい}に技術的な意味以外にはたいして意味がないでしょう。しかし逆に、十分に「鉄斎」を見たことのある人にとっては、小林さんの文章は少しもむずかしくないし、おそらく、これほど自然に、これほど容易に納得のゆくものはないかもしれません。小林さんが『モーツァルト』を書いたときに、多くの作曲家たちは、はじめて読んだ小林さんの文章をちっともむずかしいとは思わなかったようです。しかし、小林さんの文芸評論に慣れていた文学青年たちは、ほとんどひとり残らず、あの文章をむずかしいと思ったことでしょう。むずかしいか、むずかしくないかは、まさに文章の側の責任ではなく、読者の側でモーツァルトを聞いたことがあったかどうか、いや、だれでも聞いていたにしても、どの程度に聞いたことがあったかということに帰着^{ききやく}【考えや物事がある点に落ち着くこと】する。

なにも小林さんにはかぎりません。また、絵と音楽だけにかぎったことではありません。

もし、本がむずかしいとか、やさしいとかいう言葉を使えば、だれにとつてもむずかしい本、だれにとつてもやさしい本と

いうものは、少ない。それは人によつて違うことで、一般にはむずかしいともやさしいともいえないのです。もう一步を進めていえば、私にとつてむずかしい本は、私にとつて必要でなく、私にとつて必要な本は、私にとつてかならずやさしい、とさえいえるでしょう。

一般に、抽象的な記述を読んで、その記述がむずかしいと思つたら、その理屈を一つの具体的な場合に於てはめてみたらどうなるだろうか、ということ想像してみるのはいい工夫です。もし、その想像がうまくゆきさえすれば、抽象的な記述だけでもむずかしいと思われた本も、にわかにやさしく見えてくるということがあるものです。

たとえば、経済原論の理屈を読みながら、焼芋を思いうかべる。農家の畑、畑での労働と肥料、掘りだした芋が市場に出てくるのに運賃がかかり、焼芋を私たちが食べるときまで、たえずそのことを考えながら、抽象的、一般的な記述を読むとはつきりしてわかりやすいでしょう。

またたとえば哲学。「存在は本質に先行する」——これではなんのことかわからぬ人も多いかもしれません。わかつたような気がしても、たしかでない。そういうときに、私は机の上の煙草の箱を手にとつて、その煙草の箱の存在が、煙草の箱の本質に先行するとはどういうことを考えます。私の手に乗っているのは、手の触覚にふれる一箱のものである。ものがまず存在し、そのものの本質が、煙草であるか、商品であるか、固体であるか、を決めるのは私の立場である。「存在は本質に先行する」というのは、ざつとそういうことらしいと合点すれば、それまでなにやらはつきりしなかつた言葉の意味が、たちまちはつきりしてくるのです。ひとつの肝どころ【要点】がはつきりすれば、あとはすらすら、——とまでゆかないにしても、まったくわかりやすくなるでしょう。

親切な著者ならば、著者みずからその想像の鍵を与えてくれています。しかし不親切な著者の場合は与えていないこともあり、また、すぐれた理論家はかならずしも、すぐれた心理学者ではありませんから、読者の想像力を助けるような鍵を、著者が忘れてしまったということもあるでしょう。そういうときには、読者のほうでみずから想像力を働かせなければなりません。鍵が見つかりさえすれば、その瞬間から、わけのわからなかつた本がたちまち氷解するようなことは、けつしてまれな

ことではないのです。たとえば、なにか経営に関する本を読んでいるときに、自分のよく知っている特定の会社の経営を思いうかべながら読めば、ただ抽象的な論理をたどるよりも、はるかにその本がわかりやすくなるでしょう。専門家が、むずかしそうに見える理論的な本を比較的是やく読むことができるのも、論理をたどりながら、同時に思いうかべることでできる具体的な事実をたくさん知っているからにはかなりません。

しかし、なんといつても、ほんとうにむずかしいのは、本を書くことで、書かれた本を読むことではない。新しい考えを思いつくことはだれにもできることはありません。しかし、だれかが思いついたことを理解するのは、原則として、それほどむずかしいことではないでしょう。⁽¹⁴⁾「コロンブスの卵」ということもあります。それにもかかわらず、むずかしい本というものが、世の中にないわけはありません。

いままで述べてきたことをまとめていえば、第一、むずかしい本の大部分が、香川景樹の言つたように文章がじょうずでないか、あるいは、著者が言おうとすることをみずから十分に理解していないかの、どちらかである。これは読者の責任ではなくて、本のほうが悪い。たとえば、ある種の学生の理論闘争や、通俗禅問答や、また雑誌・新聞にときどき見かける美術批評のようなものです。こういうものは、日本語としてたいへん悪いばかりでなく、たぶん、書いている本人にも、なにを言っているのか、くわしくつきつめれば、はつきりしていないのだらうと察せられます。第二は、悪い本ではなくて、りっぱな本になかにもむずかしい本があります。しかしそれは、だれにとつてもむずかしいのではなく、ある人にはむずかしく、またほかの人にはやさしいのです。「求めよ、さらば与えられん」といいます。求める人が「ロマ書」(新約聖書中の一書)を読めば、「ロマ書」はむずかしくないでしょう。求めない人が読めば、同じ「ロマ書」がむずかしい。文章が悪いのではないし、著者の考えがあいまいなのでもありません。問題は、本の側ではなく読者の側にあるのです。しかし、なぜ、一冊の本が私にとつてむずかしいかといえは、その理由は、つまるところ、私がその本を VIII、べつの言葉でいえば、私にとつて少なくとも、いまその本は VII という点に帰着するでしょう。

(加藤周二「読書術」より・一部改変)

問一 文中の（A）（D）にあてはまる最適な言葉を次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア もちろん イ ちょうど ウ たとえば エ しかし オ あるいは

問二 — 部①・④・⑥・⑫は、どういうことを言っているのか、説明しなさい。

問三 — 部②・③・⑧・⑨・⑩・⑪・⑬の指示内容を、答えなさい。

問四 — 部⑤「すべての読者にすすめられる精神的衛生法です」とありますが、筆者はどういう理由でこの読書法を読者にすすめているのか、答えなさい。

問五 文中の

I

V

 に入る最適な語句を答えなさい。ただし、

I

・

III

・

V

 は体に
関する漢字一字が入ります。

II

 は三字、

IV

 は二字の漢字を考えて答えなさい。

問六 筆者が「文章がむずかしくなる」ということは、— 部⑦で「口実【言い訳】にすぎない」と言っていますが、それはなぜですか。

問七 本文から次の段落が抜けています。どの形式段落の前に入れるのが適当ですか。その段落の初めの三字を答えなさい。

楽譜のことを考えれば、もつとはつきりします。譜記号は、ふつう私たちが日常生活に使っている言葉の体系とは、まったく別の約束から成りたっている、もう一つの象徴の体系です。その記号を覚えれば譜を読むことができますし、指が動きさえすれば、その譜の示すとおりにピアノの鍵をおすこともできるでしょう。しかし、その約束を覚えなければ、楽譜の全体はまったくわけのわからないものです。学問のなかには数学を使うものがあります。数学もまた一種の言葉のようなもので、これを習っていれば問題を正確に読みとることができるし、習っていなければなにもわかりません。

問八 文中の

VI

 にあてはまる最適な言葉を、本文から漢字二字で抜き出さない。

問九 — 部⑭「『コロンブスの卵』とありますが、この文章ではどのようなことをたとえているのですか。解答欄「こと」につな

ながらるように四字で答えなさい。

問十 筆者の主張を踏まえた文になるように、文中の

VII

・

VIII

 に入る最適な六字を答えなさい。

二

次の1～10の文中の(カタカナ)を漢字で書きなさい。

- 1 家を(ルス)にする。
- 2 (ウチュウ)飛行士を目指す。
- 3 黒板に(ジシャク)をつけた。
- 4 会議で(サンピ)が分かれた。
- 5 遠くの(サンミヤク)を眺める。
- 6 台風接近の(ケイホウ)が流れた。
- 7 生まれ(コキヨウ)に帰る。
- 8 (ハタ)を振って応援した。
- 9 竹刀を(カマ)える。
- 10 話し合いの機会を(モウ)ける。

